



その男のうちにあがると室内は乱雑に物が溢れ

雑然とした様、私の他にも数人の男らが招かれていた。

その男は昔の知り合いで何やら同窓会の後に、話がはずみその男の自宅へ場がなだれ込んだかのようである。

さてその雑然の中に人間あり、女である。

女は小柄で私が良く知る麻子だ。麻子が手を後ろ手に縛られ、着物姿、猿ぐつわをされてこちらを悲しそうに見ている。あるいはこの部屋にいる男の何人かはすでに麻子を慰みものとしてあつかったのかも知れない。おそらくこの家の主人は確実にそのようにしたと思われた。私は目を反らし逡巡したが麻子を無視する事に決めた。

男は私に酒をすすめ、同様にすすめられた一同が飲んだ。

宴も終わり一度各自にあてがわれた小部屋に散会すると私は猛烈に自分を責めたくて来た。最近麻子が私に会おうとしなかったのは妻のある私を気づかっていたの事であろうか、今日私が彼女を無視した時何もいわず頷いたのも未だ私を気づかっているのか、否、頷いたのは私の勝手な思い込み。

必ずあの女は私を恨んでいるはず。ただでさえ最近連絡を怠ってた私である。

私は麻子を助けるべきであった。この世の地獄から麻子を救い幸せにできるかも知れなかった。私は小部屋で怒りを沸騰させるとこの家の主人に制裁するため部屋のドアを力強く開けた。その時ぱったりと麻子がいた。すでになわと猿ぐつわから逃れておりその時は掃除婦のような格好であったが悲しそうな目はそのままであった。

私が麻子、私が悪かったこれから主人に抗議してやるとうつむく麻子に言うとせきを切ったように

泣き出し、私のむねに飛び込んで来た。私の背中が搔きむしられ私気持ちを波立たせた。

私の手も麻子の背をなでた。

ただしその時妻が現れ、最初我々に気付かなかったが私が目で即すところらに気がついた。私は目だけで妻に訴えた。このように可哀想な女がいたので慰めているところであるので先に行っていて

欲しい。特に誤解されるような女ではないのだと。（妻は後からそのような関係の男女は背中をあのようになでるべきではないと指摘したが。）いずれ麻子も私の様子がおかしいので側に妻がいる事を気がついて

次第に冷静になった。冷静なふりをしたのかも知れぬ。そして私は男に抗議し制裁与えたあとのうちを後にしたのだった。

その後麻子がどうなったのか知らぬ。



## 新しい会社

---

何やら緊張している。

それは新しいオフィスようだ。初入社の日かもしれない。ドアを開けて事務所に入ると開放的な空間。大きい窓が外の陽光を惜しげ無く取込んでいる。

ビルの設計の都合なのか。事務所は「く」の字型に曲がっているが、ある場所まで行けば奥の方まで見渡せた。

机の並びは「島」式である。外資系企業に11年勤めたあと転職した前の会社は日本式の中小企業でやはり島式だった。そうだ俺はあの会社を辞めて新しい職を求めたのであった。前の会社を辞めたのは、そう先週のこと。

こんなに早く次の職が決まったのであろうか。前の会社、何か社内で互いに足を引っ張り合うような

陰湿な会社であった。直属の上司も暗い男であった。

やおら近い机で男が立ち上がった。

「えー。では西園寺君から一言ご挨拶を！」

みるとその男は前の会社の上司であった。果たしておれはここで着任の挨拶をするのか？あるいは退社の挨拶をするべきか？

「えー西園寺です。これから頑張りますので皆さんも頑張ってください」

おれはどっちにもとれるような挨拶をとりあえずすませた。

「じゃ、この時間だし。せっかくだから飲みにいきましょう。皆さんも手のあいている人は是非」

そういつてその暗い上司はハンガーから上着を取るとさっさと事務所の出口へ向かうのであった。俺は黙ってついていくことにする。思った通り誰もついてこない。

すると事務所のドアのわきに半紙に書かれた連絡が貼付けているのが目に留まる。

「西園寺君10月21日に退職することになりました」

ああやはりこの夢は退職の日なのだ。おれはまだ就職先が決まっていないことを思い出し目が覚めた。

静かな夜であった。

ちょうどその夜は茜さんが私のうちに泊まりに来ていたのである。

彼女は38歳で結婚したばかり。つくりも美しく男性の話もないわけではなかったがなかなか良い話に恵まれなかったようだ。その彼女が突然結婚すると言い出したのが半年前。驚いているまもなく彼女の妊娠の兆候はたにも明らかになってきた。相手の男性を紹介するようと言っていたのだがなかなかその機会は訪れず、そのうち彼女は出産した。しかし相手の男性と何か問題があったのかまもなく分かれたという。

いやこれすべて彼女と大学の同窓で今もつきあい続けている妻が私に話してくれた話。私が茜さんと会ったのはその夜であった。もっとも私が仕事から帰ると彼女は既に眠っていた。食事をすると急に眠くなったと言って部屋に入ってしまったという。

「赤ちゃんにミルクをやってくださらない。

はじめてだからなあ。と僕は少し戸惑いながら赤ん坊がいるらしい籠のほうへ歩いていった。それは近所の公園に行くのにサンドイッチを入れていくにはうってつけのバスケットだった。まだこんなにちいさいのかしら？

確か生まれて二三ヶ月たっているはずなのに。

わたしはバスケットをのぞき込んで驚いた。ふかふかの座布団の中央にあるのは弁当箱くらいの入れ物で何やらどろっとした液体が八分ほど満たされている。その中に5センチほどの何とも得体の知れない物体が浮かんでいるではないか。

それはふわふわとして卵の殻を割ったときに丸い黄身の端っこについているもやもやとした繊維状の物を

思い出される。しかもそれに目と鼻と口がついていてかろうじて何か生物であるという主張をしている。そのとき口がぱっくり開き、小さな歯が見えた。

目が開きこちらを見つめ、意志のある表情を見せたのである。間違いなくこれは人間の素である。しかしそんなことがありうるのか？全くこれでは未成熟である。普通は母胎の中でこのような状態を経過するのではないだろうか。未熟児は保育器の中で育てられる。これは未熟児ですらない。人間の原型をかろうじてとどめているだけのなめくじである。

しかもどう巧妙に固定した物か生物は常に上を向いて水の中に顔を突っ込まないようにしているように見える。

「あなた、早くミルクをあげて頂戴。おなかをひどく空かせている様だから。

しかしこれは。こんな赤ん坊見たこと無いね。

わたしは妻から受け取ったスポイト状のほ乳機で生物の口元を濡らす作業を始めた。生物は泣き止み、丸く処理されたスポイトの先を舐め始めた。そのときである。ふとしたはず見に生物の体が反転し、液体の中に顔を突っ込む形になってしまった。あなた、たいへん。

大丈夫だ。羊水の中では常に水の中に浮かんでいたわけだから。

といつつ私は弁当箱を水がこぼれないように気を付けながら左右に揺すり、何とか生物を上向きにしようと試みた、内心どきどきしながら。しかしなかなか生物は顔を見せない。ときどき上向きになるがまたくるりと下を見てしまう。気のせいだろうかそうこうするうち生物の表情は恨めしげにこちらをみるような何やら目と目が離れて少しづつ人間らしさを失っていくように見える。私は焦った。

「ねえきみ。茜さんを起こしてくれないか。」

わたしの言葉にただならぬ状況を察した妻は頷くと隣の部屋の茜さんを起こしにたった。

「あ」

そのときである。揺すっていた弁当箱から液体がだらっと数滴落ちた。それと同時に生物も弁当箱から流れ落ちてしまったのである。その時には既に生物とどろどろ溶液との境はかなり曖昧になってきていた。

わたしは床にはいつくばって生物を探した。しかし運の悪いことにわが家の床は南南東に向かって

僅かに傾いているために水でもこぼそう物なら南南東に流れ落ちてしまう。そしてその方向にはネズミのでは入り口と思われる小さな穴が空いたままになっていた。

液体はどろりと南南東に流れていく。わたしは思いっきり手を伸ばし、しかも手の指の間に透き間が空かないようにしっかり固定しながら液体をせき止めた。そしてゆくりとかき寄せた。